

秀品収穫は
苗美人
から。



すばやく根から吸収される苗灌注1回で、速効食害停止&約1ヶ月残効!
悪い虫をつけさせない。



水やり(灌水)と同様方法の
灌注処理!

主な通用害虫



*株元灌注の場合は作物体になるべく薬液がかからないよう処理してください。

農林水産省登録：第24090号 ベリマークSC、第23556号 デュボン ベリマークSC

2021年1月現在

●ラベルをよく読んでください。 ●記載以外には使用しないでください。 ●小児の手の届く所には置かないでください。
●空容器は圃場などに放置せず、3回以上水洗し、環境に影響のないよう適切に処理してください。洗浄水はタンクに入れてください。 ●防除日誌を記帳しましょう。

©2021 FMC Corporation. All Right Reserved. FMC、FMCロゴ、®を付した商標は、FMC Corporationまたはその米国およびその他の国の子会社・関連会社の登録商標です。



日本曹達株式会社

〒100-8165 東京都千代田区大手町2丁目2番1号
☎(03) 3245-6178 FAX(03) 3245-6084
<https://www.nippon-soda.co.jp/nougyo/>

NO.556-2101CC



野菜灌注用殺虫剤

ベリマーク® SC

powered by
CYAZYPYR®
ACTIVE INGREDIENT

ジアミド剤のプロFMCの卓効成分
シアントラニプロール(通称:サイアジビル®)を18.7%高配合!



大事な育苗期にこの1剤で、 幅広い重要害虫を速やかに防除。 長い残効で、作物をしっかり守ります。

はじめに

ベリマーク®SCの有効成分シアントラニプロール(通称:サイアジビル® 23ページ)は、世界で2番目のアントラニリックジアミド系殺虫成分です。
日本においてベリマーク®SCは葉菜・果菜等の野菜向けの灌注専用殺虫剤として開発され、2014年10月に農薬登録されました。
サイアジビル®は、幅広い殺虫スペクトラム、速やかな食害停止効果、優れた残効性により、害虫の密度を長期間抑え、作物を保護する特長を有しています。
ベリマーク®SCはジアミド系特有のチョウ目害虫、ハエ目害虫に対する優れた効果に加え、コナジラミ類、アザミウマ類、アブラムシ類等にも卓越した効果を示します。
一方で、有用昆虫(天敵・訪花昆虫)への影響は少なく、IPM(総合的病害虫・雑草管理)に適合しています。
また、害虫への効果発現が早いことから、害虫によるウイルスの媒介抑制効果も確認されており、新たな害虫防除体系の確立に貢献できる製品として期待されています。

トピックス

1. 灌注専用剤ならではの有効性と省力性

速やかな吸収移行性、根からの吸い上げによる長い残効性。
ポットやセルトレイをたくさんまとめて簡単に処理。
慣行の粒剤処理に比べ、作業時間が短縮できて省力的!

2. 作物別に効果的な使い方をご紹介!

黄化葉巻病などのウイルス病対策、IPMにも有効。
トマト、きゅうりなど果菜、ねぎ、キャベツなどの葉菜類に、
どのタイミングで、どのように使うとより効果的かを解説します。

3. 幅広い害虫スペクトラム

適用作物に対して、吸汁性、食害性、チョウ目害虫の各害虫種への効果をご確認ください。

はじめに	2
トピックス	2
5つの優れた特長	3
作物別情報	
果菜類	4~5
ねぎ	6~7
葉菜類	8
基本特性	
作用特性	9
吸収移行性	9
殺虫スペクトラム	10
有用昆虫への影響	11
発育齢別活性	12
温度別殺虫活性	13
速やかな効果発現	13
ウイルス媒介抑制効果	14

害虫への効果	
吸汁性害虫への効果	15~17
チョウ目害虫への効果	18~20
食害性害虫への効果	21
登録内容・基本情報	
適用害虫と使用方法	22
注意事項	23
混用事例	23
成分・性状	23
安全性	23

5つの優れた特長

1 幅広い殺虫スペクトラム

コナジラミ類、アザミウマ類、アブラムシ類、ハモグリバエ類や、ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナガ等のチョウ目害虫等の幅広い害虫種、害虫の各ステージに高い効果を発揮します。

詳しくは10ページへ

2 速やかに食害をストップ ウイルス媒介の抑制効果も

害虫の摂食・吸汁行動を速やかに停止させます。害虫によるトマト黄化葉巻病、きゅうり黄化えそ病のウイルス媒介を抑制する効果も認められています。

詳しくは13~14ページへ

4 有用昆虫、周辺環境等に対する 高い安全性

天敵、訪花昆虫への安全性が高く、IPMプログラムに組み込むことが可能です。また、灌注処理なので周辺作物へのドリフトや使用者への薬剤被ばくも少なくすることができます。

詳しくは11ページへ

3 速やかな吸収移行性による 長い残効性

本剤を灌注処理すると薬剤は速やかに根から吸収されて作物の導管を通して地上部に移行します。この作用により定植後3~4週間の残効を示します。

詳しくは9ページへ

5 初期生育の作物に対する 高い安全性

育苗期の灌注処理に適した製剤となっているため苗に対して高い安全性が確認されています。上市以来、薬害の事例はありません。

詳しくは4~8ページへ



灌注処理による省力的で安定した初期防除で、充実の収穫を。

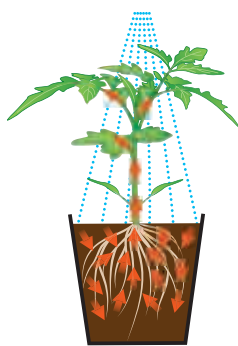
コナジラミ類への高い効果

速やかに害虫の食害を止める

幅広い殺虫スペクトラム

上手な使い方

- 作物体に移行した生育期初期に発生するアブラムシ類、コナジラミ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類の加害・他株への移動を速やかに停止させます。
- 軟弱な定植前の幼苗に対して安全性も高く、処理後の生育に対する影響も確認されていません。



処理タイミング

- 育苗中の苗を健全に育てたい
- 育苗中の管理作業を低減したい
- 作付面積を増やしたい

こんな方には

育苗期後半処理

- 鉢上げ時に処理されたベリマーク®SCは、素早く作物に吸収され定植後3~4週の間、害虫の加害を防ぎます。
- 軟弱な幼苗を加害する害虫を防除し、健全な定植苗を確保できます。
- 育苗中の苗に対しても薬害の事例はありません。



定植前処理

- 定植前にベリマーク®SCを灌注処理することで、定植後3~4週の間、防除効果を発揮します。
- 定植直後の薬剤散布が省け、他圃場の定植等の作業を優先できます。
- ミツバチ、マルハナバチ・天敵類に影響が無いので、処理後速やかに受粉昆虫、天敵を導入できます。

こんな方には

- 定植後の害虫被害を長期に抑えたい
- 多忙な定植作業中の害虫防除を減らしたい

注意:ベリマーク®SCの総使用回数は1回です。

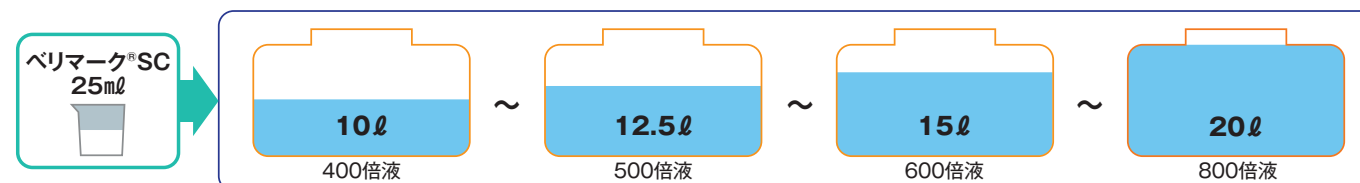
処理方法

ベリマーク®SCを作物に処理する際には、所定の希釈倍数に調製した薬液を作物苗(育苗ポット、セルトレイ他)に灌注処理してください。処理されたベリマーク®SCは速やかに作物体に吸収されます。



●処理量(トマトの場合)

薬量:400株あたり25ml 希釈水量:400株あたり10~20ℓ(1株あたり25~50ml)



※ベリマーク®SC(100ml)1本でトマト1600株処理できます。

※株数によって異なります。

作業時間の短縮

定植時の多数の苗に対して薬剤処理を行う場合、ベリマーク®SCの灌注処理は慣行の粒剤植穴処理と比較して作業時間を大幅に短縮できます。また、屈みこむことなく、立って作業を行えるため、作業による疲労度も少ないと評価されています。

●処理時間短縮



2016年デュポン株式会社 社内試験
 【試験概要】場所:宮城県白石市 処理日:8月22日 作物名:きゅうり
 【試験方法】灌注処理:はすろジョウロ(容量10ℓ)を用い、キュウリ苗300株を処理(400倍、25ml/株)した。その後、定植作業を行った。
 粒剤処理:粒剤(2g/株)を定植作業と同時に植穴処理した。
 【評価方法】それぞれの処理の様子を動画で撮影し、下記の作業時間を計測した。灌注処理:300株処理に要した時間
 粒剤:5株処理に要した時間(作業の最初と最後は避け、平均的な中間5株処理に要した時間を計測)
 計測値をそれぞれ1,000株処理に換算し、評価を行った。

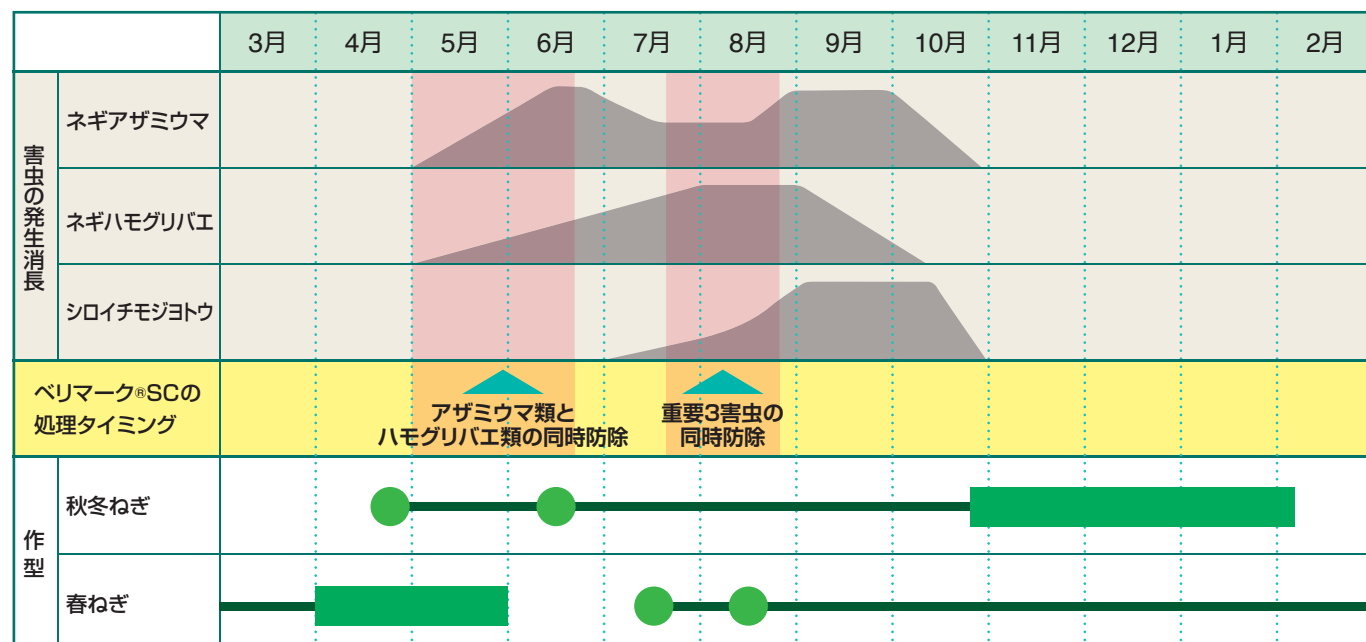
安定した収穫に繋げる大事な栽培初期を健全に。

幅広い殺虫スペクトラム

速やかに害虫の食害を止める

定植後3~4週間の長い残効

ベリマーク®SCを使った効果的な防除タイミング



●: 定植 ■: 収穫 (注意: ベリマーク®SCの総使用回数は1回です。)

処理方法 ベリマーク®SCは育苗期・生育期で灌注処理が可能です。

育苗期

- 動力噴霧器、ジョウロを使用して、多くの苗に直接短時間で処理することができます。
- 一度の薬液調製で数日分の苗を処理できるため、定植のスケジュールが柔軟に調整できます。

●おすすめ処理時期



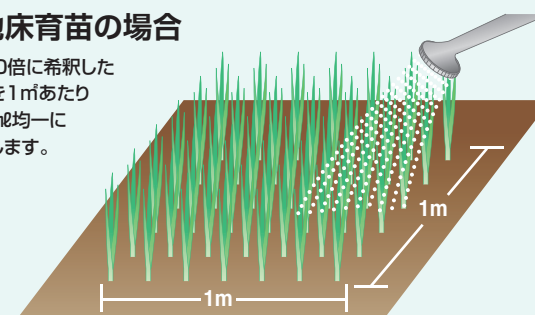
●セルトレイ灌注処理時の薬量と処理水量

セルトレイ枚数	120枚	80枚	40枚	20枚	8枚
ベリマーク®SC	150ml	100ml	50ml	25ml	10ml
処理水量	60ℓ	40ℓ	20ℓ	10ℓ	4ℓ



●地床育苗の場合

2000倍に希釈した薬液を1㎡あたり500ml均一に処理します。



生育期

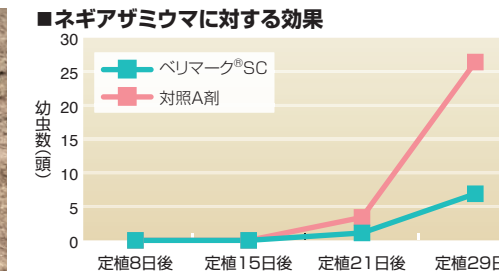
ベリマーク®SCは生育期の本圃での灌注処理も可能です。



主な対象害虫



定植後3~4週間の残効により作物が健全に生育します。



【試験概要】2017年 埼玉県久喜市(社内試験)
 処理方法: ベリマーク®SC 400倍0.5ℓ/枚、対照A剤 200倍0.5ℓ/枚
 処理日: 5月16日 定植日: 5月17日 調査日: 5月25日、6月1日、7日、15日
 調査方法: 展開している新葉2枚を調査部位とし、1区あたり10株を定点観察(3反復)する
 調査項目: ネギアザミウマ(幼虫数)

作物別情報

基本特性

吸汁性害虫への効果

チョウ目害虫への効果

食害性害虫への効果

登録内容・基本情報

作物別情報

基本特性

吸汁性害虫への効果

チョウ目害虫への効果

食害性害虫への効果

登録内容・基本情報

灌注処理で定植後から幅広く害虫を防除し、健全な苗の生育に貢献します。

幅広い殺虫スペクトラム

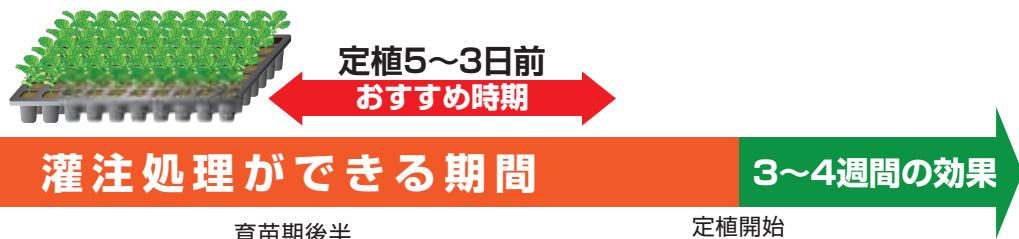
定植後3~4週間の長い残効

適用作物への安全性が高く、薬害の事例はありません

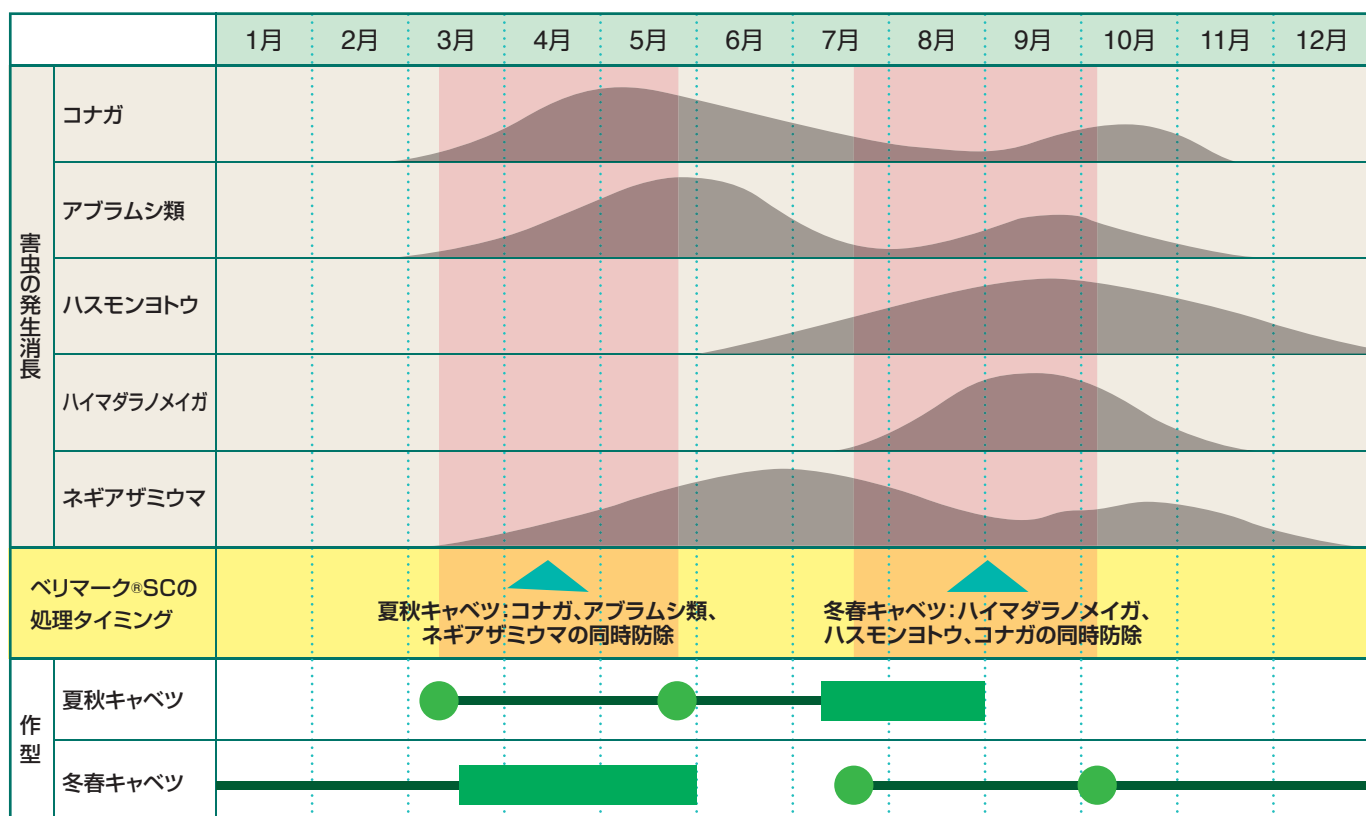
上手な使い方

- 定植前のセルトレイ苗にベリマーク®SCを灌注処理することで、定植後3~4週間にわたって防除効果を発揮します。
- 定植5~3日前に灌注処理をしておくことで、多忙な定植前後の農作業にゆとりが持てます。
- 育苗中の苗に対しても薬害の事例はありません。

処理タイミング



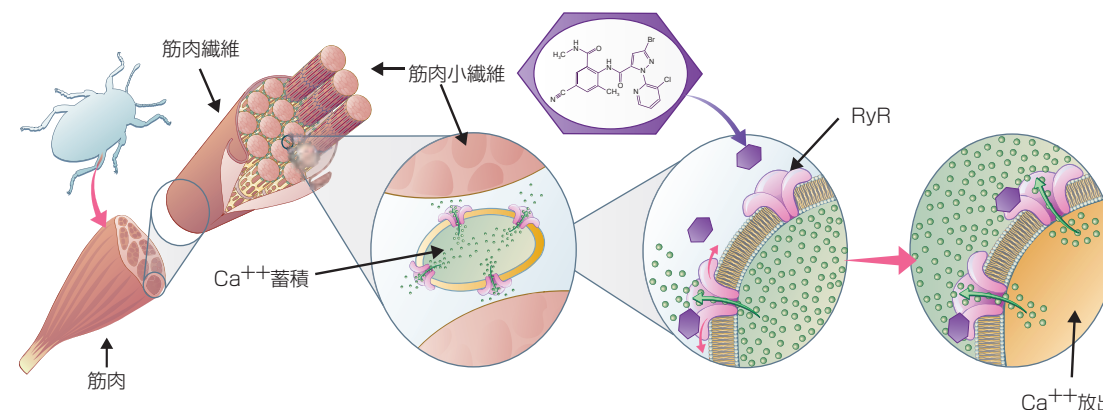
ベリマーク®SCを使った効果的な防除タイミング



作用特性

筋肉細胞の筋小胞体は細胞内のカルシウムイオン濃度を調整することにより筋肉の収縮・弛緩をコントロールしています。サイアジピル®(23ページ)は筋小胞体のリアノジン受容体(RyR)に結合して筋小胞体のカルシウムイオンを細胞内に放出させます。その結果、昆虫は筋収縮を起こして速やかに活動を停止し、死亡します。また、昆虫のリアノジン受容体に選択的に作用し、ヒトの受容体に反応しないことがヒトへの安全性が非常に高い理由です。

サイアジピル®作用機構



サイアジピル®は昆虫の筋肉に作用して昆虫の行動に影響を与えます。

有効成分が根部からの速やかで優れた吸収と上位葉、展開葉への速やかな移行性

ベリマーク®SCは、灌注処理を行うことで、土壌中の作物根部から効率よく吸収されるよう調整されています。ベリマーク®SCを土壌に灌注処理すると導管を通して作物上部に移行し、有効濃度が作物内に3~4週間存在します。また、処理時に作物体に付着した成分も茎葉部より作物内部に速やかに移行します。これにより害虫に対して優れた残効性を示します。

下図は放射性同位体を標識としたサイアジピル®をトマトに灌注処理した場合の薬剤の吸収状況を示しています。

放射性同位元素¹⁴Cを使った葉内への成分の展開(処理日からの日数1、3、7、14、28日)

4葉期のトマトの苗にサイアジピル®188ppmを30ml灌注した。定植1、3、7、14、28日後に葉を採取し2日強、ガラス板上に挟みFuji Phosphor imagerでスキャンした。

(2010年 米国デュポン社 スタインハスケル研究所)



ベリマーク®SCは、上位葉に移行し速やかに有効濃度に達します。植物の成長にとまらぬ、根部から吸収されたベリマーク®SCは植物体に移行し、新たに成長する部位にも長期間の優れた防除効果を維持します。

コナジラミ類、アブラムシ類、アザミウマ類、また有効成分サイアジピル[®] ならではのチョウ目害虫など幅広い害虫に優れた活性を示します。

サイアジピル[®]として確認されている殺虫スペクトラムは下記の通りです。

目	害虫名	活性	作物群	目	害虫名	活性	作物群	目	害虫名	活性	作物群
チョウ目	コナガ	○	野菜	チョウ目	チャノホソガ	○	茶	カメシ目	ワタアブラムシ	○	野菜 果樹
	アオムシ	○			チャハマキ	○			モモアカアブラムシ	○	
	ヨトウムシ	○			チャノコカクモンハマキ	○			ダイコンアブラムシ	○	
	ハスモンヨトウ	○			ヨモギエダシヤク	○	ニセダイコンアブラムシ		○		
	オオタバコガ	○			コブノメイガ	○	タイワンヒゲナガアブラムシ		○		
	シロイチモジヨトウ	○			フタオビコヤガ	○	チューリップヒゲナガアブラムシ		○		
	ツマジロクサヨトウ	○			ニカメイチュウ	○	ジャガイモヒゲナガアブラムシ		○		
	ハイマダラノメイガ	○			ウコンノメイガ	○	ダイズアブラムシ		○		
	ワタヘリクロノメイガ	○			マメシンクイガ	○	マメアブラムシ		○		
	ネキリムシ類	○			トマトハモグリバエ	○	イチゴケナガアブラムシ		○		
	カブラヤガ	○		マメハモグリバエ	○	ニンジンアブラムシ	○				
	タマナヤガ	○		ナモグリバエ	○	ムギクビレアブラムシ	○				
	ウリノメイガ	○		ネギハモグリバエ	○	ユキヤナギアブラムシ	○				
	ナカジロシタバ	○		タネバエ	○	キクヒメヒゲナガアブラムシ	○				
	ウババ類	○		タマネギバエ	○	ミカンクローアブラムシ	○				
	イラクサギンウババ	○		オウトウショウジョウバエ	○	オンシツコナジラミ	○				
	タマナギンウババ	○		ミカンバエ	○	タバココナジラミ	○				
	アワノメイガ	○		イネヒメハモグリバエ	○	ヒメフタテンヨコバイ	○				
	シロオビノメイガ	○		キスジノミハムシ	○	チャバネアオカメムシ	×				
	キアゲハ	○		ダイコンサルハムシ	○	ツヤアオカメムシ	×				
	ナガイモコガ	○		アリモドキゾウムシ	○	ミカンキジラミ	○				
	ネギコガ	○		イモゾウムシ	○	フタテンヒメヨコバイ	○				
	モモシンクイガ	○		ドウガネブイブイ	○	チャノミドリヒメヨコバイ	○				
	モモノゴダラノメイガ	○		ヨツモンカメノコハムシ	○	チャトゲコナジラミ	○				
	スモモヒメシンクイ	○		ワサビルリイロサルゾウムシ	○	ツマグロヨコバイ	○				
	ナシヒメシンクイ	○		トビイロヒョウタンゾウムシ	○	トビイロウンカ	×				
	キンモンホソガ	○		ケシキスイ類	○	ヒメトビウンカ	○				
	ギンモンハモグリガ	○		ヒメヒラタケシキスイ	○	セジロウンカ	×				
	リンゴコカクモンハマキ	○		コアオハナムグリ	○	カネタタキ	○				
	トビハマキ	○		ゴマダラカミキリ	○	コバネイナゴ	○				
ミダレカクモンハマキ	○	アオドウガネ	○	イナゴ類	○						
モモハモグリガ	○	ドウガネブイブイ	○	ネギアザミウマ	○						
ミカンハモグリガ	○	マメコガネ	○	チャノキイロアザミウマ	○						
オオタバコガ	○	ミカンナガタムシ	○	ミナミキイロアザミウマ	○						
ケムシ類	○	モモチョッキリゾウムシ	○	ミカンキイロアザミウマ	○						
アメリカシロヒトリ	○	マダラカサハラハムシ	○	ヒラズハナアザミウマ	○						
クワゴマダラヒトリ	○	イネミズゾウムシ	○	モトジロアザミウマ	○						
ヒメモンシロドクガ	○	イネドロオイムシ	○	ワサビクダアザミウマ	○						
マイマイガ	○			ダニ目	ホウレンソウケナガコナダニ	○					
アゲハ類	○			ハチ目	カブラハバチ	○					
ナミアゲハ	○										
クロアゲハ	○										
シロオビアゲハ	○										
モンキアゲハ	○										
クビアカスカシバ	○										
コスカシバ	○										
ヨモギエダシヤク	○										
ヒメボクトウ	○										

[記号の説明]
 ○: 実用的な活性あり
 ○: 活性あり
 ×: 活性なし

有用昆虫への影響

昆虫名	試験方法	常用濃度での影響の目安 (IOBC基準)*	試験実施機関(報告年)
セイヨウオオマルハナバチ	ミニトマト圃場試験: 400倍希釈、25ml/株	◎(0日)	(一社)日本植物防疫協会 茨城研究所 (2012年)
スワルスキーカブリダニ (若虫)	ピーマン試験(リーフディスク法): 400倍希釈、25ml/株	◎(影響なし)	(一社)日本植物防疫協会 茨城研究所 (2011年)
コレマンアブラバチ (成虫)	キャベツ試験(リーフディスク法): 400倍希釈、0.5ℓ/セルトレイ	◎(影響なし)	(一社)日本植物防疫協会 茨城研究所 (2011年)

*:天敵等に対する影響は◎:死亡率0~25%、○:25~50%、△:50~75%、×:75~100%(野外・半野外試験)、
 ○:死亡率0~30%、○:30~80%、△:80~99%、×:99~100%(室内試験)
 訪花昆虫に対する影響は影響日数。常用濃度に幅がある場合は、濃度が高い方で試験を実施した。



セイヨウオオマルハナバチ



スワルスキーカブリダニ



コレマンアブラバチ

スワルスキーカブリダニ写真提供:アリスタライフサイエンス(株)

作物別情報

基本特性

吸汁性害虫への効果

チョウ目害虫への効果

食害性害虫への効果

登録内容・基本情報

作物別情報

基本特性

吸汁性害虫への効果

チョウ目害虫への効果

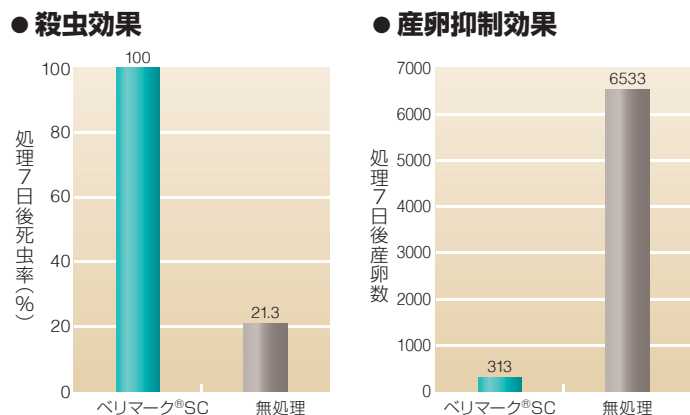
食害性害虫への効果

登録内容・基本情報

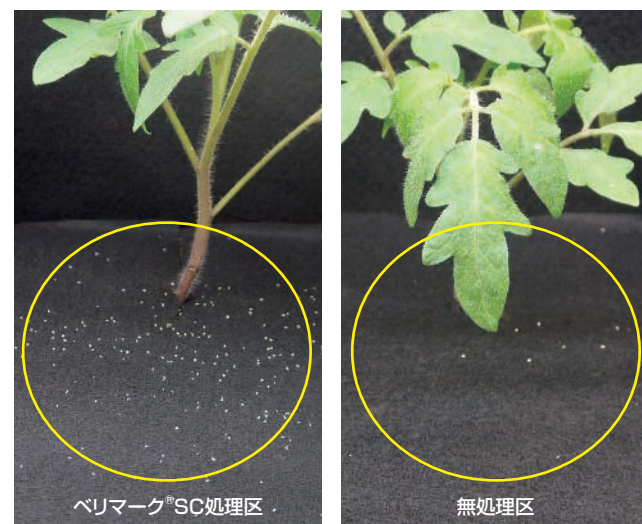
若齡幼虫から成虫まで 幅広い害虫のステージに効果を示します。

成虫に対する効果(タバココナジラミ)

ベリマーク[®]SCを灌注処理したトマト苗において、成虫への高い殺虫効果を示しました。
また、産卵数も減少し、次世代の密度抑制効果も確認されました。

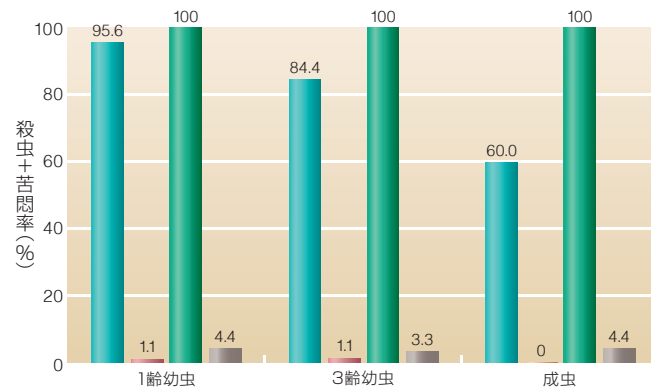


● 処理4日後の様子



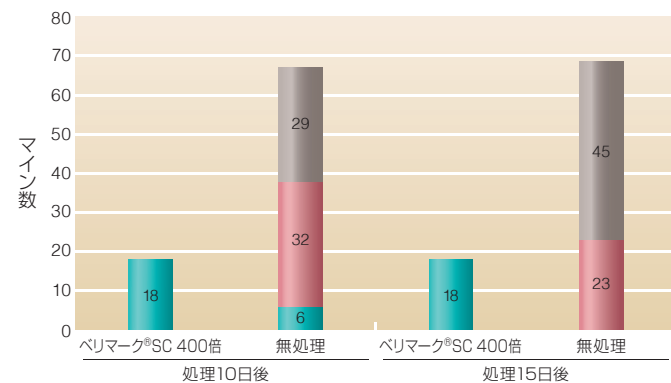
● 1齡、3齡、成虫に対する効果(ワタアブラムシ)

ベリマーク[®]SCは、1齡幼虫、3齡幼虫並びに成虫のいずれの发育ステージでも十分な効果を示しました。



● 孵化幼虫に対する効果(ナモグリバエ)

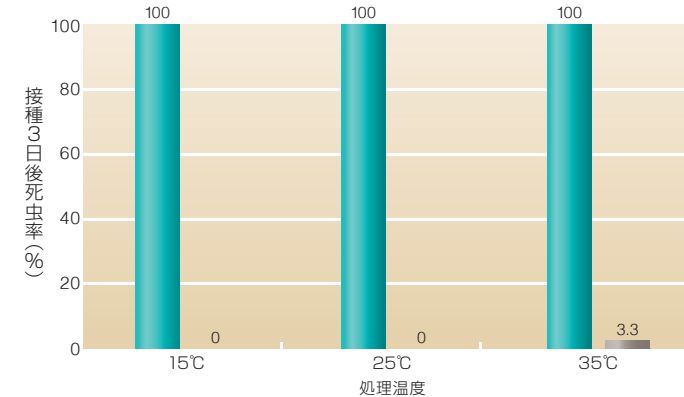
ベリマーク[®]SCを灌注処理したレタス苗では、孵化直後の幼虫に高い効果を発揮し、葉内に産卵するナモグリバエも効果的に防除することができます。



2014年 大塚アグリテクノ(株)(現 OATアグリオ(株))
【試験概要】
試験期間: 2月28日~3月18日
対象作物: レタス(シスコF)
播種日: 1月5日
定植日: 3月3日
区制: 1区6株1反復
処理方法: 株元に2.5ml/株灌注した後、プランターに定植し、ガラス温室内にて底面給水にて管理
放虫方法: 処理3日前、レタス苗に対しナモグリバエに6時間産卵させた。
調査方法: 処理10日後、15日後に全株のマイン数をカウントした。

温度による影響を受けず安定した活性を示します。

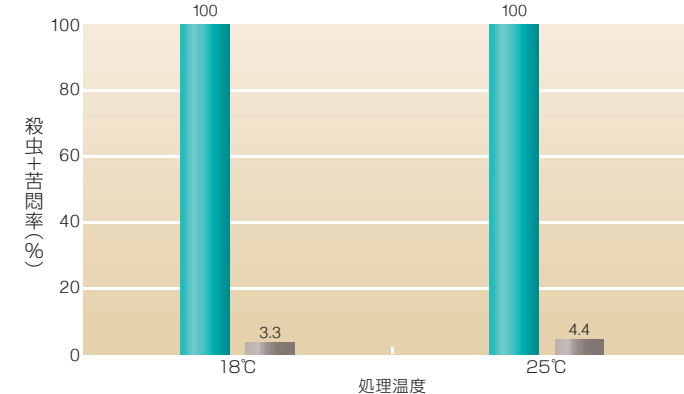
● 処理温度別の殺虫効果(ハスモンヨトウ)



■ ベリマーク[®]SC 400倍
■ 無処理

2013年 クミアイ化学工業(株)生物科学研究所
【試験概要】
接種日: 10月9日
対象作物: キャベツ(金系201号)
播種日: 9月3日
定植日: 9月25日
処理日: 9月20日
区制: セルトレイ(処理時)、4号素焼き鉢(定植時)
60mlプラスチックカップ(接種時) 3連制
処理方法: 15℃、25℃、35℃の人工気象室内で、セルトレイ1株当たり3.9ml灌注処理し、処理5日後に素焼き鉢に苗を移植
放虫方法: 移植後14日目に1株当たり葉を1枚採取し、供試虫10頭を接種
調査方法: 供試虫の接種3日後に死虫率を調査

● 処理温度別の殺虫効果(ワタアブラムシ・1齡幼虫)

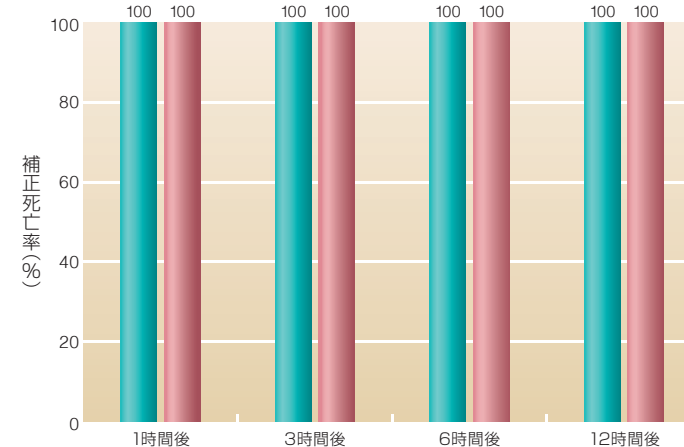


■ ベリマーク[®]SC 400倍
■ 無処理

2013年 日本書達(株)小田原研究所
【試験概要】
対象作物: きゅうり(光3号P型)
区制: 1区1株 3反復
処理方法: 9cmポリポット植えのきゅうりに、ベリマーク[®]SCを所定濃度(400倍)の薬液25mlで灌注処理した。
放虫方法: 処理5日後、ワタアブラムシ1齡若虫を株あたり30頭放虫した。
調査方法: 恒温室(25℃)またはインキュベータ内(18℃)で管理し、放虫3日後に生存・苦悶虫数を調査した。

速やかに効果を発現。

● 孵化幼虫に対する効果(ハスモンヨトウ)



■ ベリマーク[®]SC 400倍
■ 対照A剤 200倍

2014年 OATアグリオ(株)研究開発部
【試験概要】
試験期間: 5月8日~5月12日
対象作物: キャベツ(四季穫)
播種日: 4月9日
定植日: 5月8日
区制: 1区2株 2反復
処理日: 5月8日
処理方法: ベリマーク[®]SCの400倍、対照A剤は200倍にそれぞれ水道水で希釈し、キャベツの株元に株当たり2.5ml灌注した後、培土を充填したプランター(25cm×12cm×15cm)に定植し、ガラス温室内で底面給水にて管理した。
放虫方法: 処理1.3.6.12時間後に第3葉をサンプリングし、孵化直後の1齡幼虫を20頭ずつ放飼して恒温室(25℃±2℃)に静置した。
調査方法: 放飼4日後に生虫数をカウントして補正死亡率を算出した。
考察: ベリマーク[®]SCのハスモンヨトウ孵化幼虫に対する効果発現は処理1時間後から認められ、処理12時間後まで対照A剤と同様に死亡率100%で推移した。

作物別情報

基本特性

吸汁性害虫への効果

チョウ目害虫への効果

食害性害虫への効果

登録内容・基本情報

作物別情報

基本特性

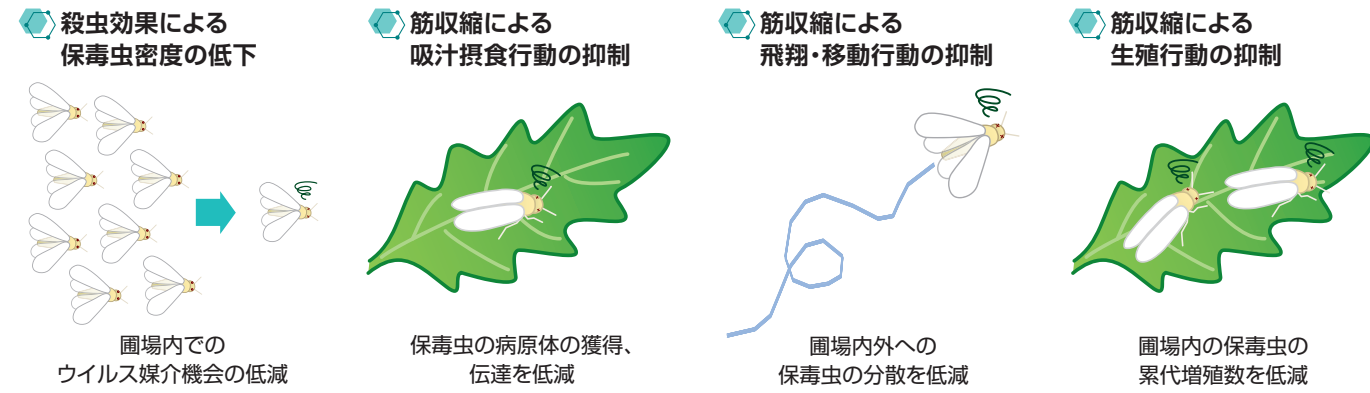
吸汁性害虫への効果

チョウ目害虫への効果

食害性害虫への効果

登録内容・基本情報

ベリマーク[®]SCは国内の試験事例において、トマト黄化葉巻ウイルスの媒介抑制効果が認められています。また、海外の事例では、複数の野菜において数種のウイルス病の発病率を低下させた事例があります。ベリマーク[®]SCの有効成分であるサイアジピル[®]自体にウイルス病に対する効果はありませんが、ウイルスを媒介するコナジラミなどの保毒虫の行動を阻害するその作用機作によってウイルスの媒介抑制を引き起こしているものと考えられます。サイアジピル[®]の作用機作がウイルス媒介抑制効果を発現する要因として以下のものが考えられます。



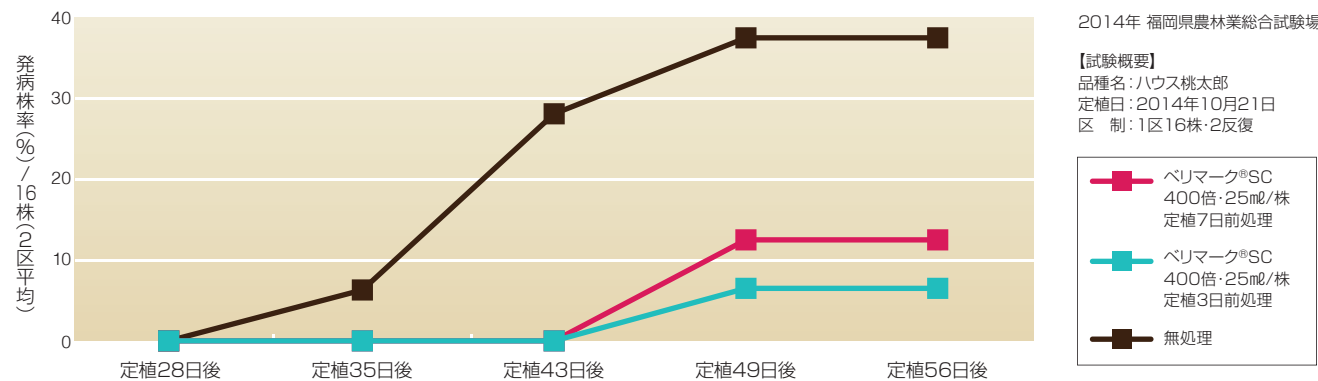
※各種ウイルス病対策にはベリマーク[®]SCをはじめとする殺虫剤による保毒虫の密度を低下させるとともに、ウイルス抵抗性品種の導入、保毒虫の侵入阻止、健全苗の使用、圃場周辺の整備等の対策が必要です。

ウイルス病と媒介昆虫

病原名	略名	媒介昆虫	作物名
トマト黄化葉巻ウイルス	TYLCV	タバココナジラミ	トマト
トマト黄化えそウイルス	TSWV	ミカンキイロアザミウマ	トマト・コショウ
ササゲモザイクウイルス	CABMV	マメアブラムシ	ササゲ・マメ類
キュウリモザイクウイルス	CMV	ワタアブラムシ	ヘチマ・キュウリ
イネツングロ桿菌ウイルス	RTBV	ツマグロヨコバイ属の複数種	イネ
Cucurbit Yellow Stunt Disorder Virus	CYSDV	タバココナジラミ	メロン
イネグラッシースタントウイルス	RGSV	トビイロウンカ	イネ
イネラギットスタントウイルス	RRSV	トビイロウンカ	イネ
ゼブラチップ	ZC	Bactericera cockerelli (キジラミの1種)	パレイショ
チリ葉巻ウイルス	CLCV	タバココナジラミ	トウガラシ

サイアジピル[®]は上記の作物・病害においてウイルス媒介抑制効果が確認されています。 出典: DuPont, Global Development Database

ベリマーク[®]SCのウイルス媒介抑制効果(トマト/黄化葉巻ウイルス)

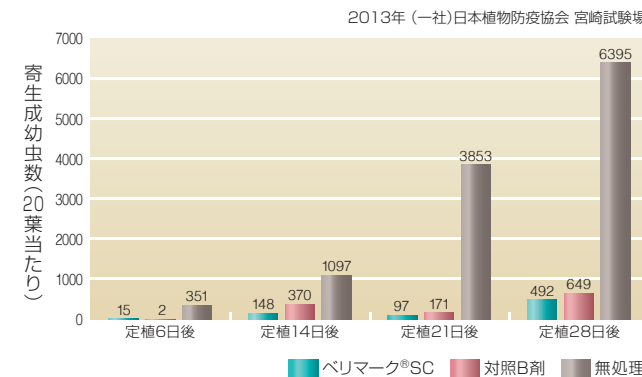


様々な類の吸汁性害虫に対して、種間差なく実用的な効果を示します。

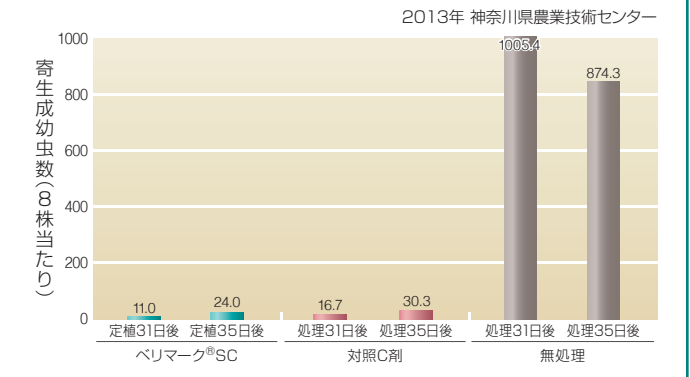
コナジラミ類



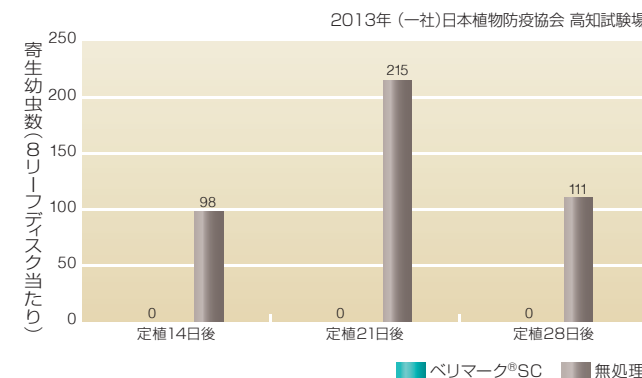
トマト/タバココナジラミ バイオタイプQ



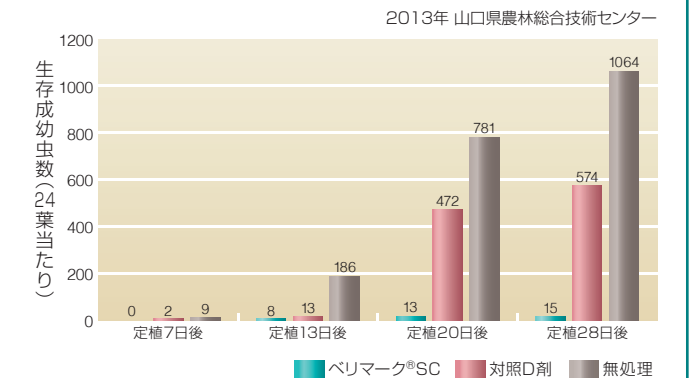
トマト/オンシツコナジラミ



なす/タバココナジラミ バイオタイプQ



きゅうり/タバココナジラミ バイオタイプQ



作物別情報

基本特性

吸汁性害虫への効果

チョウ目害虫への効果

食害性害虫への効果

登録内容・基本情報

作物別情報

基本特性

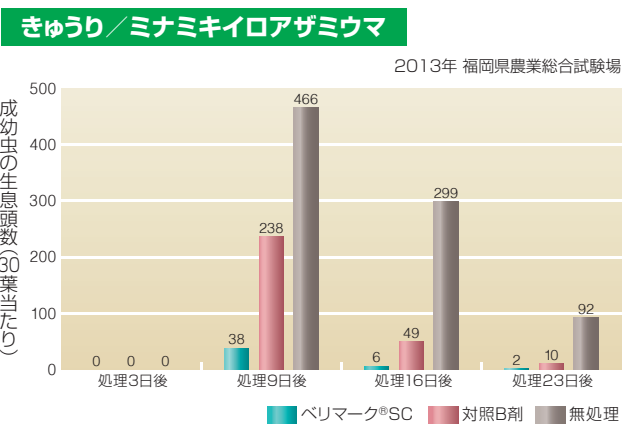
吸汁性害虫への効果

チョウ目害虫への効果

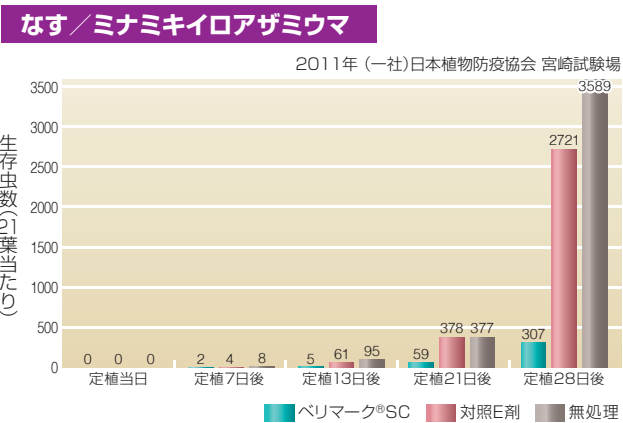
食害性害虫への効果

登録内容・基本情報

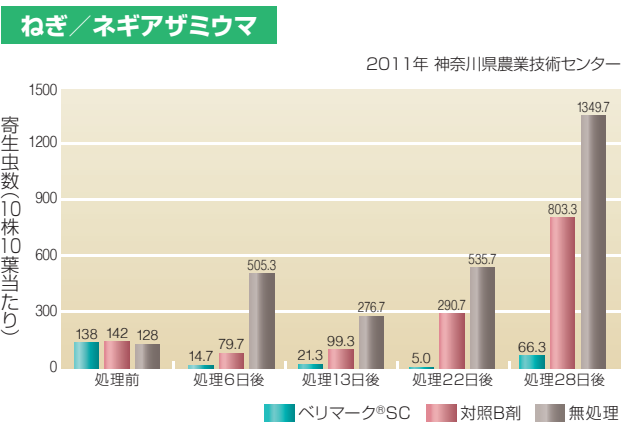
アザミウマ類



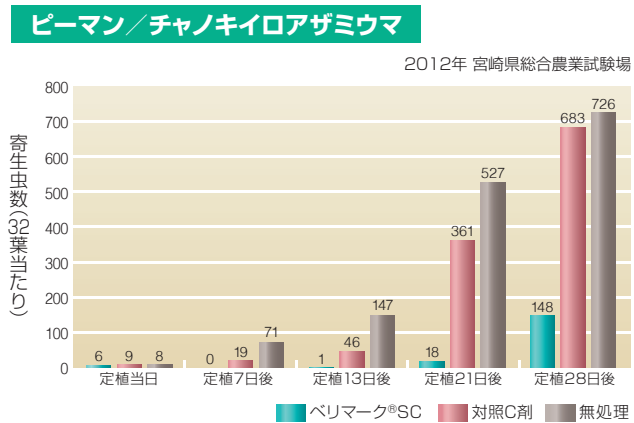
【試験概要】◎品種:エクセレント筋成353 ◎区制:1区 15株 2反復 ◎発生程度:少→多発生(放虫) ◎播種:6月4日 ◎定植:6月21日 ◎処理方法:ベリマーク[®]SCは、定植3日前に所定量を処理し、対照B剤は定植時に処理した。◎処理時の作物ステージ:2~3葉期 ◎調査日:処理 3日後(6月21日)、9日後(6月27日)、16日後(7月4日)、23日後(7月11日) ◎調査方法:各区内の全株について、1株当たり中位葉から2葉抽出し、合計30葉の葉裏に生息するミナミキアザミウマの幼虫と成虫を調査。



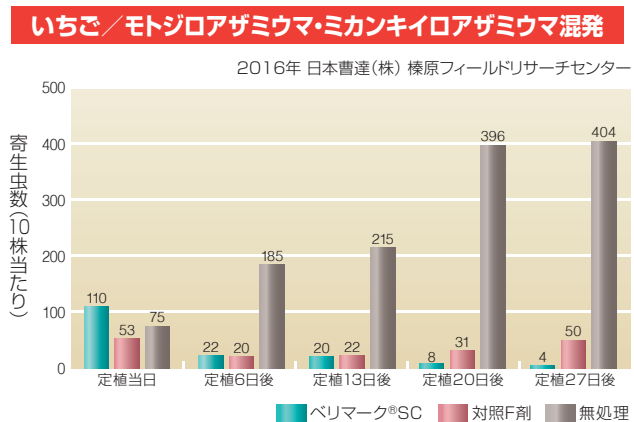
【試験概要】◎品種:筑陽 ◎区制:1区 9株 3反復 ◎発生程度:中→多発生 ◎播種:3月22日 ◎定植:5月19日 ◎処理日:5月18日(定植前日) ◎処理方法:ベリマーク[®]SCは、直径12cmポリポットの株元へ所定量を処理。対照E剤は5月19日(定植当日)に定植直後の株元へ処理。◎処理時の作物ステージ:開花期 ◎調査日:定植当日(5月19日)、7日後(5月26日)、13日後(6月1日)、21日後(6月9日)および28日後(6月16日)。◎調査方法:区中央部7株の株当たり中位葉3枚を選び、生存虫数を成虫、幼虫別に調査。(3区合計)



【試験概要】◎品種:西田 ◎区制:1区 70株 3連制 ◎発生程度:多発生 ◎播種:3月24日 ◎定植:5月18日 ◎処理日:6月1日 ◎処理方法:本圃に所定量を灌漑処理。◎処理時の作物ステージ:生育期 ◎調査日:処理6日後(6月7日)、13日後(6月14日)、22日後(6月23日)、28日後(6月29日) ◎調査方法:各区20株の各株中心2葉について幼虫数および成虫数を調査。(3区平均)

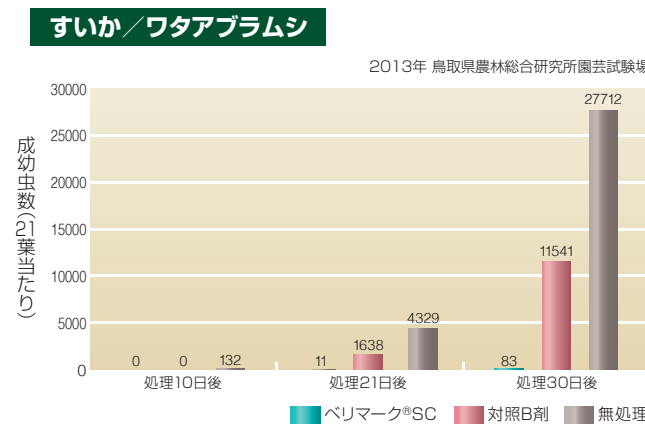


【試験概要】◎品種:京鈴 ◎区制:1区 8株 2反復 ◎発生程度:少→多発生 ◎定植:8月9日 ◎処理方法:ベリマーク[®]SCは定植前に25ml/育苗ポット灌漑処理を行い、対照C剤は定植時に所定量を処理。◎調査日:定植7日後(8月16日)、散布13日後(8月22日)、21日後(8月30日)、28日後(9月6日)。◎調査方法:各区8株について上位展開葉4葉の葉裏に寄生する成虫数を調査。(2区合計)

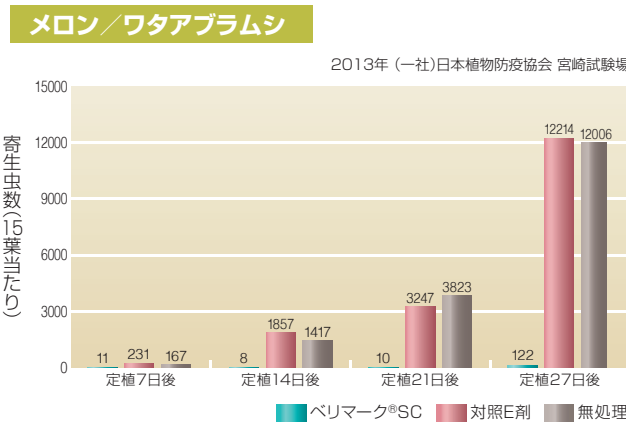


【試験概要】◎品種:とちおとめ ◎区制:1区 12株 3連制 ◎発生程度:多発生 ◎定植:12月1日 ◎処理日:11月26日(定植5日前) ◎処理方法:ベリマーク[®]SC 1000倍希釈液、対照F剤 500倍希釈液をそれぞれ定植5日前に株当たり50ml小型ジョウロを用いて灌漑処理した。◎処理時の作物ステージ:育苗期(9cmポリポット) ◎調査日:定植当日(12月1日)、定植6日後(12月7日)、13日後(12月14日)、20日後(12月21日)、27日後(12月28日) ◎調査方法:各区両端2株を除く10株の全葉に寄生する成虫および幼虫(混発したミカンキアザミウマ含む)を調査。

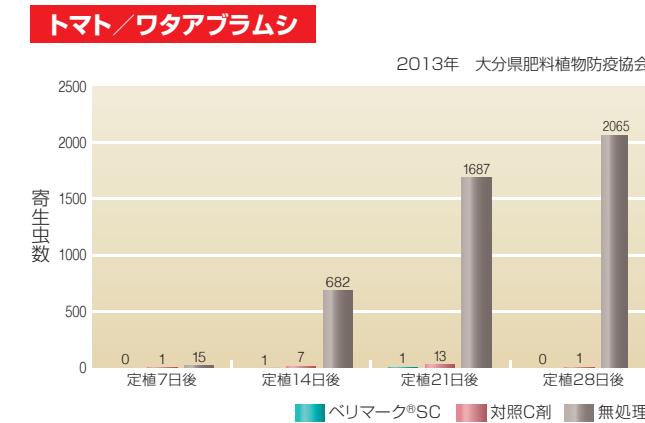
アブラムシ類



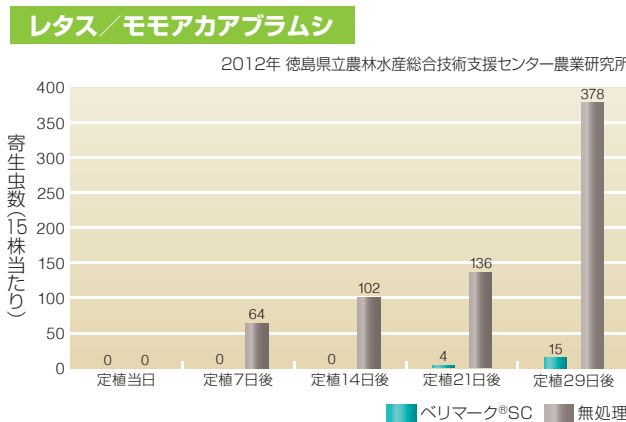
【試験概要】◎品種:筑波の香 ◎区制:7株/区 3区制 ◎発生程度:多発生 ◎定植:4月25日 ◎処理日:4月22日 ◎処理方法:ベリマーク[®]SCは定植3日前に葉液を希釈して規定量をポット(9cm径)に灌漑。対照B剤は規定量を計りとり、定植時に手で植穴土壌混和。◎処理時の作物ステージ:定植前 ◎調査日:処理10日後(5月2日)、21日後(5月13日)、30日後(5月22日)。◎調査方法:各区7株について、1株当たり3葉を選び、アブラムシ成虫数を調査。



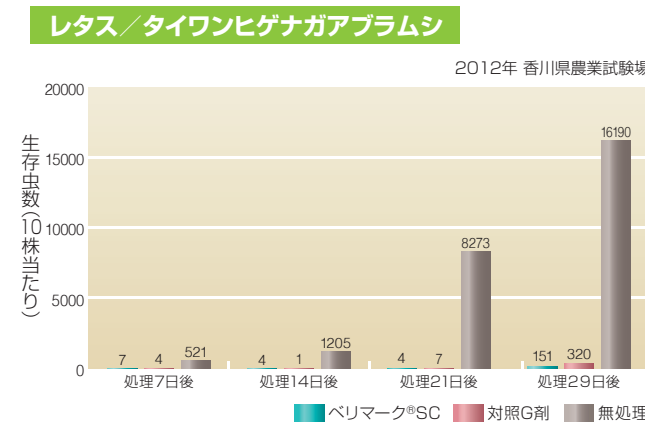
【試験概要】◎品種:プリンス ◎区制:1区 7株 3反復 ◎発生程度:少→多発生 ◎播種:4月22日 ◎定植:5月17日 ◎処理日:5月13日(定植4日前) ◎処理方法:ベリマーク[®]SCは800倍希釈液をポットあたり50ml株元に灌漑。対照E剤は1株当たり1gを株元に散布し、十分量の灌水を行った。◎処理時の作物ステージ:育苗期(本葉4枚) ◎調査日:定植7日後(5月24日)、14日後(5月31日)、21日後(6月7日)、27日後(6月13日) ◎調査方法:区内中央付近の5株当たり3葉(計15葉)の寄生虫数を有翅・無翅別に計数した。(3区合計)



【試験概要】◎品種:進栄 ◎区制:1区 10株 3連制 ◎発生程度:多→中発生 ◎播種:4月2日 ◎直径10cmのポリポットに株元へ5月4日 ◎定植:5月20日 ◎処理日:5月16日(定植4日前) ◎処理方法:定植4日前に800倍液をピペットにより1ポット当たり50mlを灌漑し、5月20日に定植を行った。対照C剤は各株1.5gを定植時株元処理を行った。◎処理時の作物ステージ:定植時(本葉8枚) ◎調査日:定植7日後(5月27日)、14日後(6月3日)、21日後(6月10日)、28日後(6月17日) ◎調査方法:各区とも5月27日は完全開葉9葉、6月1日以降は、全葉のアブラムシ類(ワタアブラムシ)の有翅・無翅の寄生虫数を調査。(3区合計)



【試験概要】◎品種:極早生シスコ ◎区制:1区 約25株 3連制 ◎発生程度:無→多発生 ◎定植:3月19日 ◎200穴セルトレイ供試 ◎処理日:3月16日(定植3日前) ◎処理量:400倍希釈液500ml ◎処理方法:セルトレイ灌漑 ◎処理時の作物ステージ:2葉期 ◎調査日:定植当日(3月19日)、7日後(3月26日)、14日後(4月2日)、21日後(4月9日)、29日後(4月17日) ◎調査方法:アブラムシ類は各区任意の15株に寄生する無翅、有翅を調査した。また、同時に発生したナメグリ工は各区任意の15株の食害痕または産卵痕の有無を調査した。(3区合計)



【試験概要】◎品種:しずか ◎区制:1区 30株 3連制 ◎発生程度:多発生(放虫) ◎播種:4月11日 ◎定植:5月8日 ◎処理日:5月8日 ◎処理方法:所定濃度に希釈した薬液をペットボトルとシャワーキャップを用いて、128穴セルトレイ当たり、0.5ℓを灌漑処理。◎処理時の作物ステージ:定植時 ◎調査日:処理7日後(5月15日)、14日後(5月22日)、21日後(5月29日)、29日後(6月6日) ◎調査方法:区当たり10株をマークし、マークした株の全葉における生存虫数を有翅と無翅個体別に分けて調査した。葉害は調査日毎に肉眼で観察調査。

様々な重要チョウ目害虫に種間差なく安定した優れた効果を発揮します。

作物別情報

基本特性

吸汁性害虫への効果

チョウ目害虫への効果

食害性害虫への効果

登録内容・基本情報

作物別情報

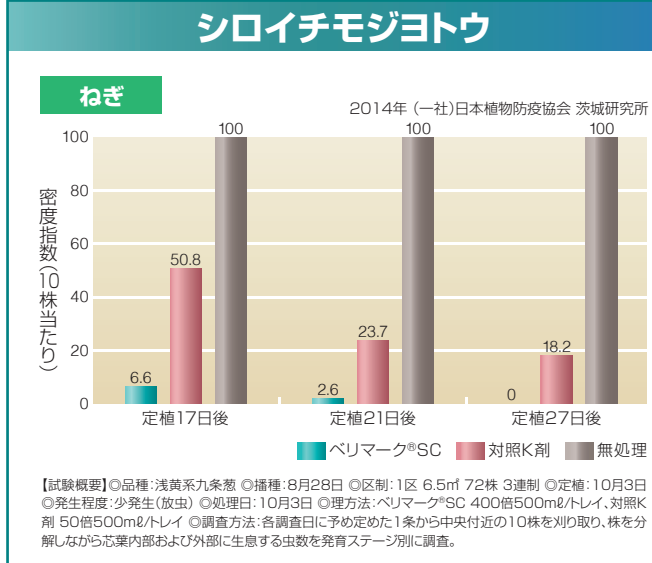
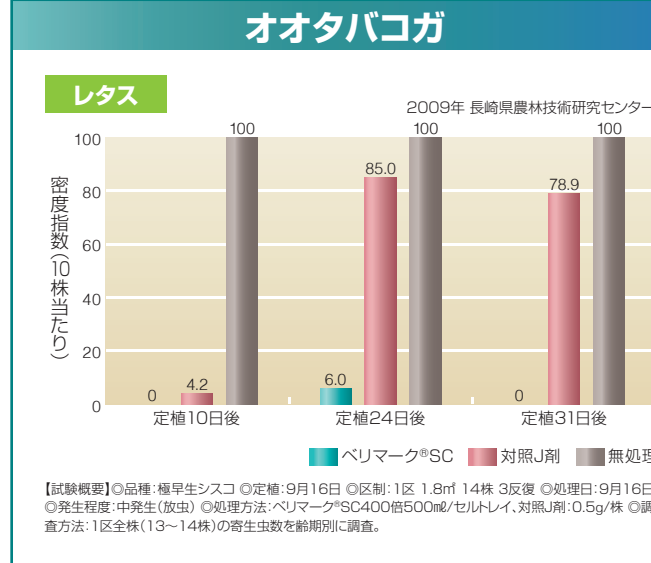
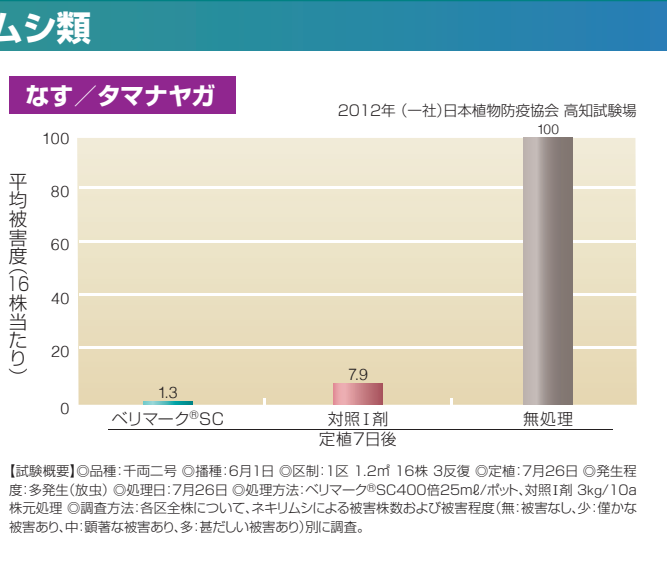
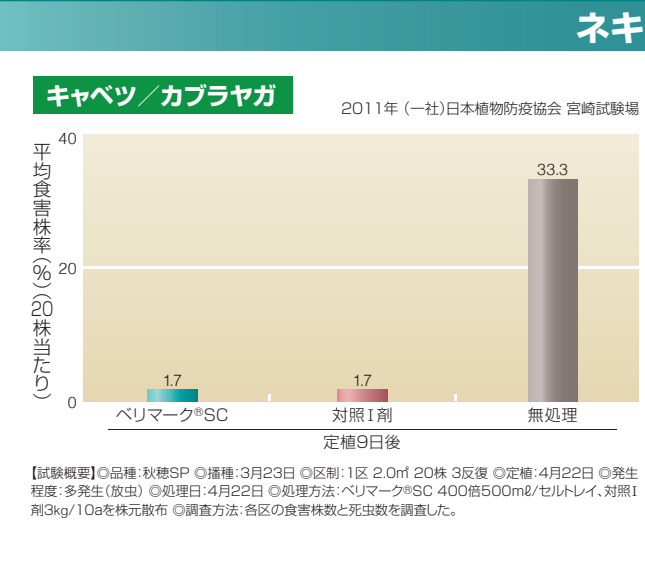
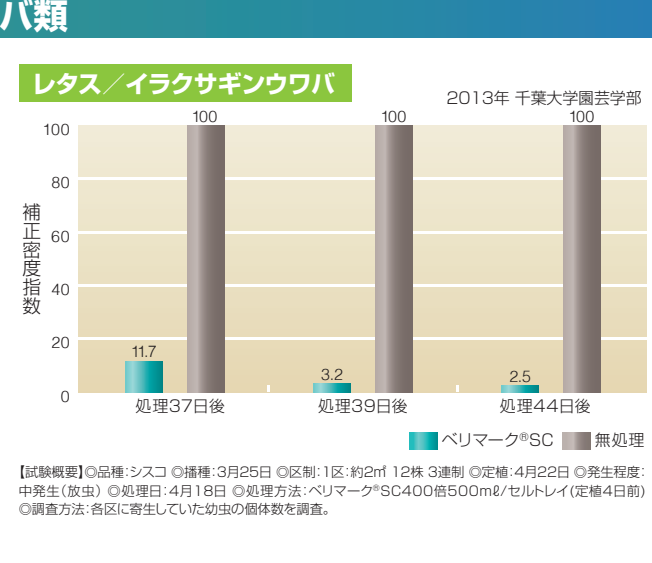
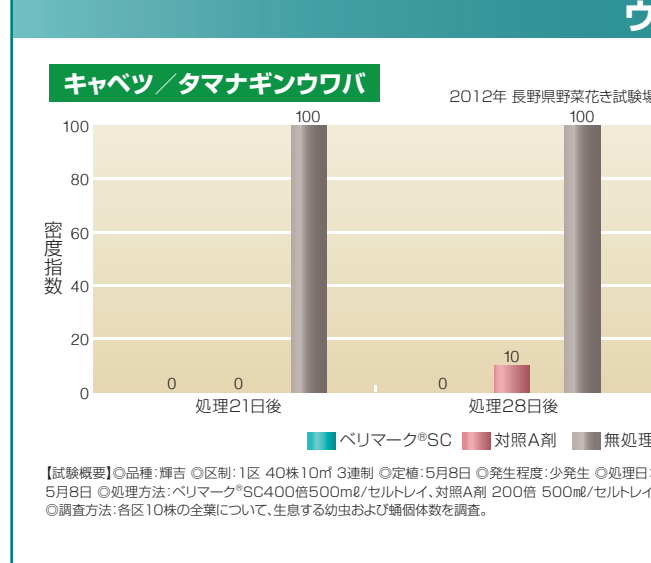
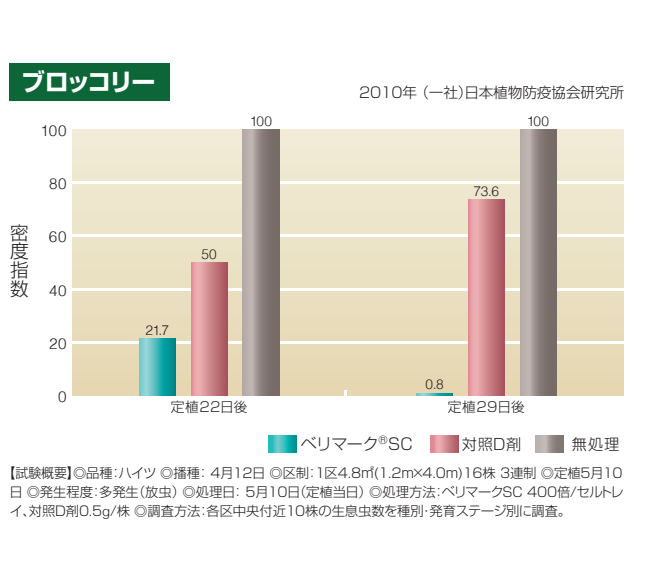
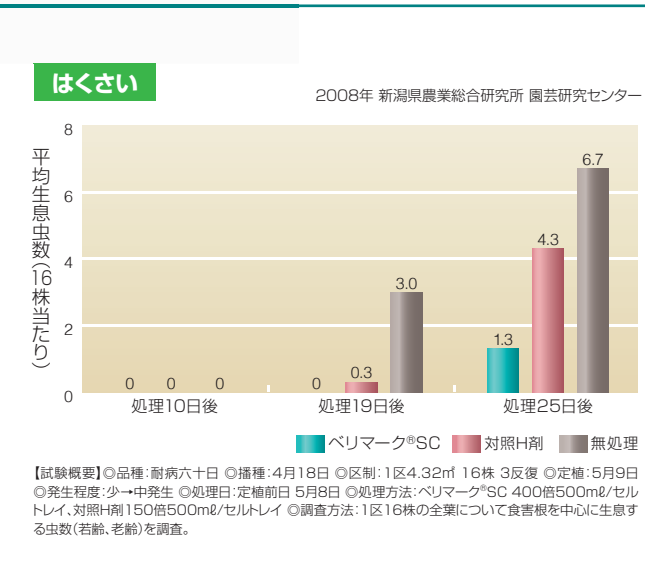
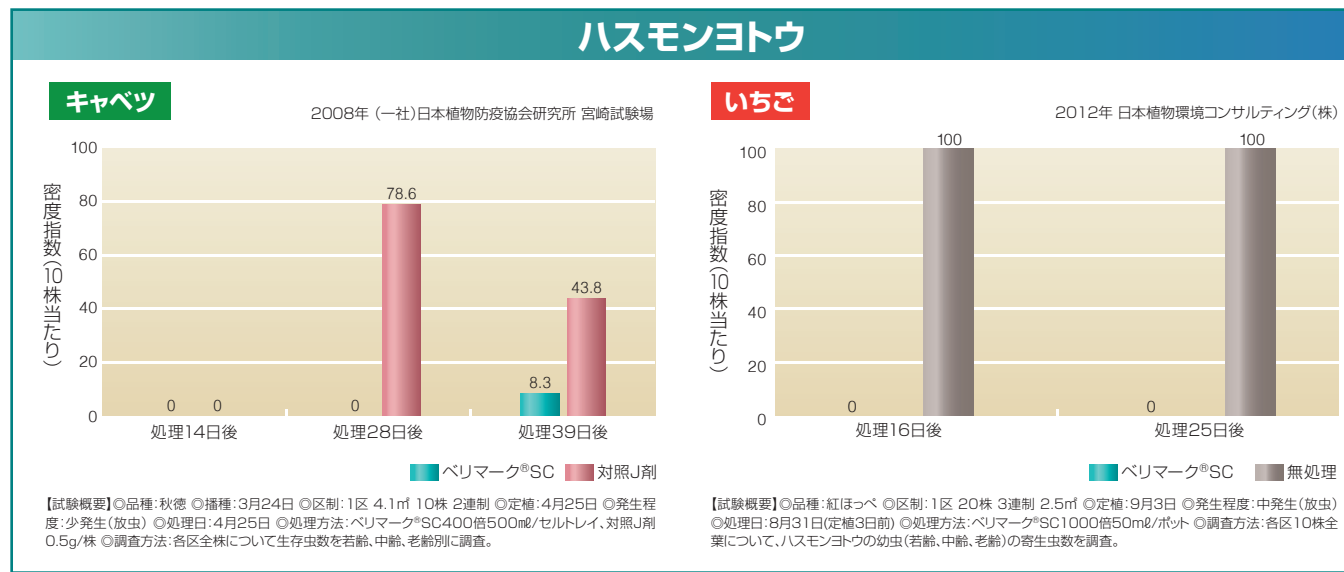
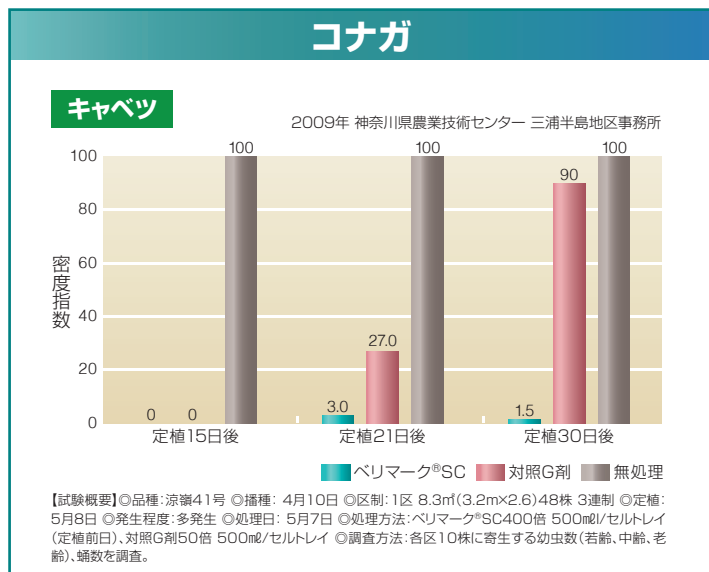
基本特性

吸汁性害虫への効果

チョウ目害虫への効果

食害性害虫への効果

登録内容・基本情報



作物別情報

基本特性

吸汁性害虫への効果

チョウ目害虫への効果

食害性害虫への効果

登録内容・基本情報

作物別情報

基本特性

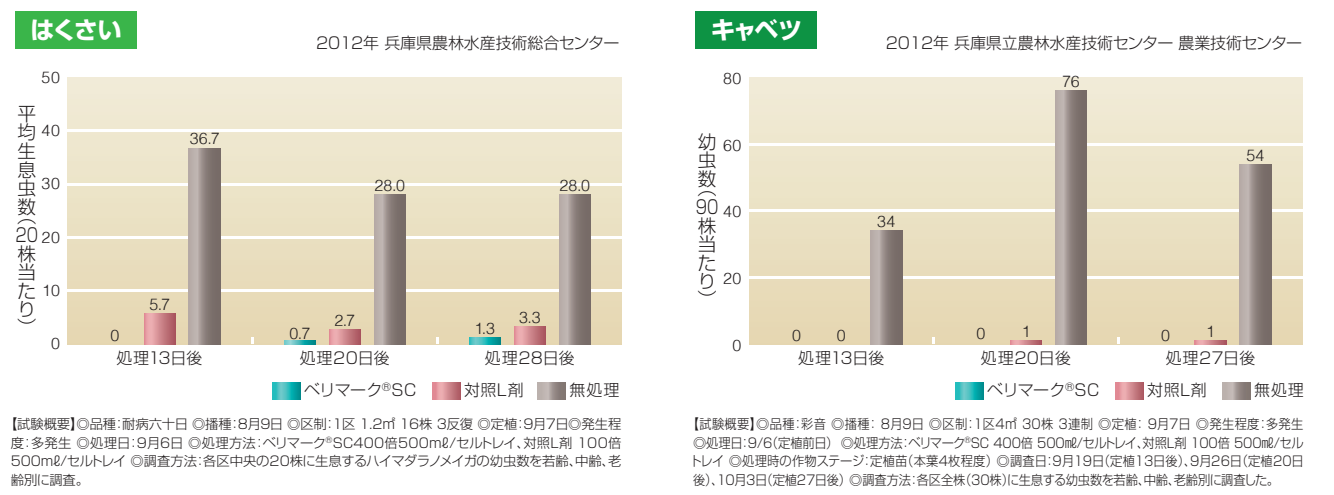
吸汁性害虫への効果

チョウ目害虫への効果

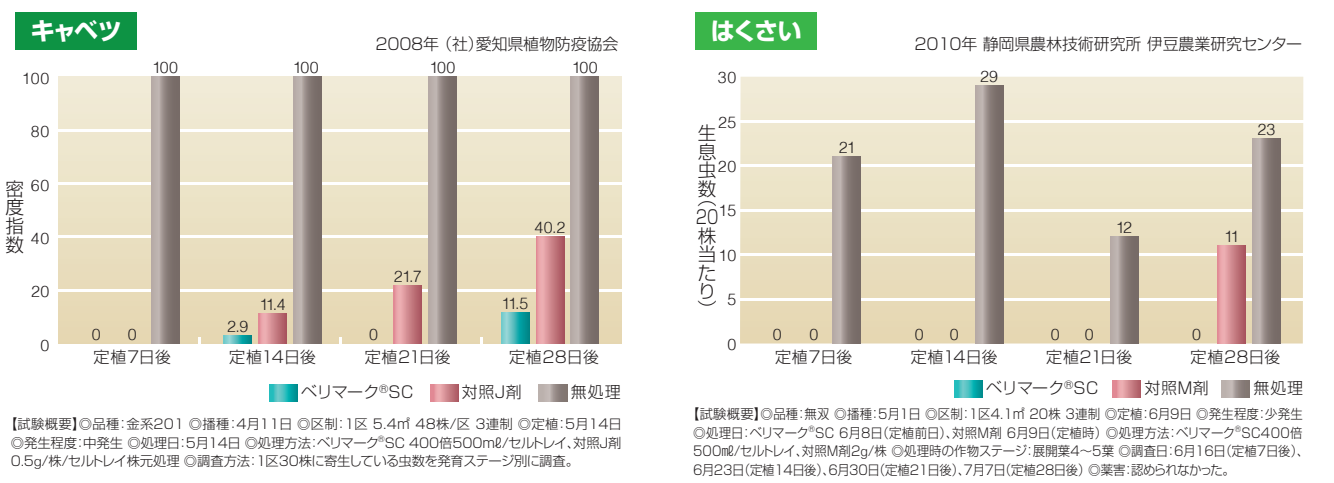
食害性害虫への効果

登録内容・基本情報

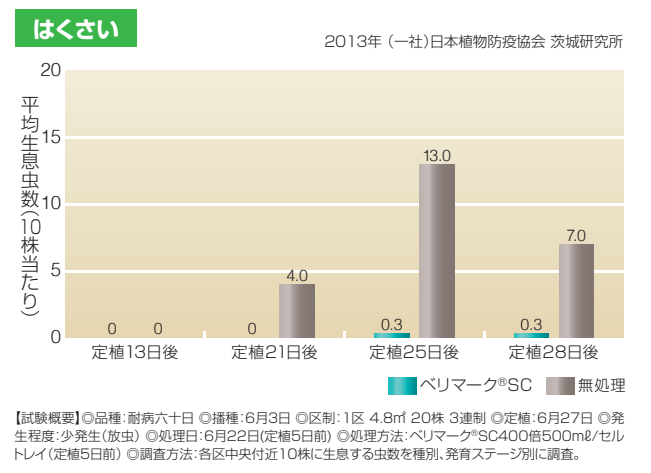
ハイマダラノメイガ



アオムシ



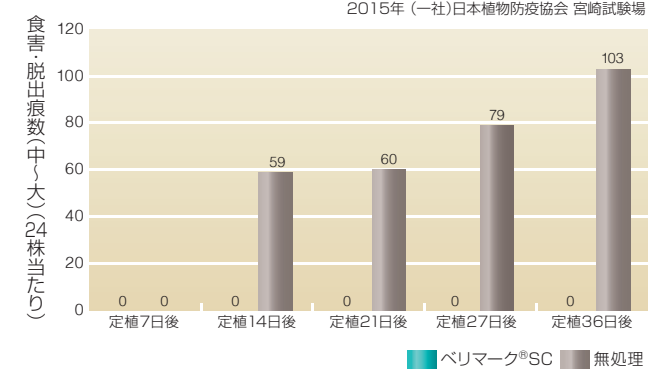
カブラハバチ(ハチ目)



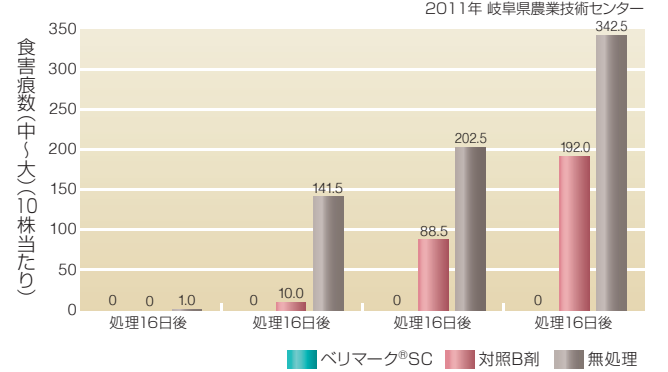
ハモグリバエ類



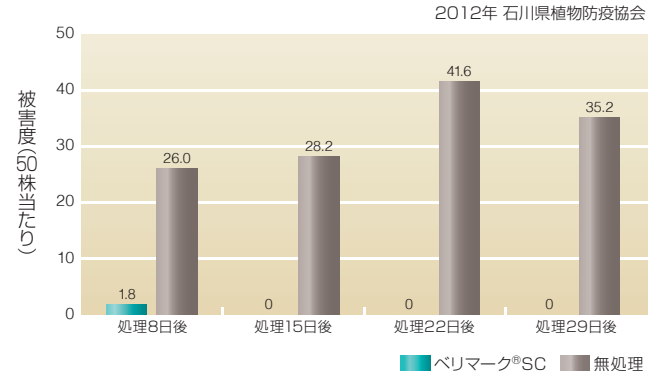
なす/トマトハモグリバエ



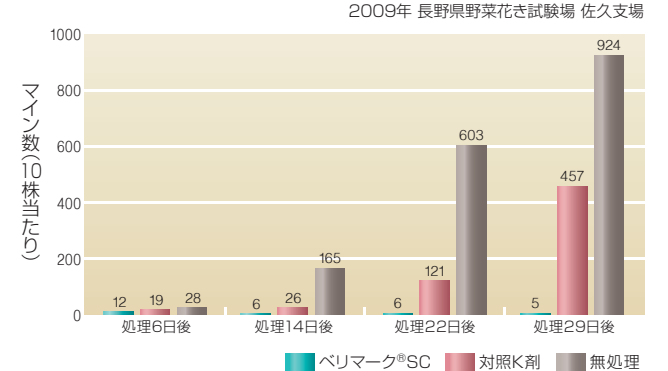
トマト/トマトハモグリバエ



ねぎ/ネギハモグリバエ



レタス/ナモグリバエ



適用害虫と使用方法

2020年6月24日現在

作物名	適用害虫名	使用量		使用時期	本剤の使用回数	使用方法	シアントラニプロールを含む農薬の総使用回数
		薬量	希釈水量				
きゅうり	アブラムシ類	400株当り 25mℓ	400株当り2~20ℓ (1株当り5~50mℓ)	育苗期後半 ~定植当日	1回	灌注	4回以内 (定植時までの処理は1回以内、 定植後の散布は3回以内)
	アザミウマ類 コナジラミ類 ハモグリバエ類		400株当り10~20ℓ (1株当り25~50mℓ)				
トマト ミニトマト	アブラムシ類 アザミウマ類 コナジラミ類 ハモグリバエ類	400株当り 25mℓ	400株当り10~20ℓ (1株当り25~50mℓ)	育苗期後半 ~定植当日	1回	灌注	4回以内 (定植時までの処理は1回以内、 定植後の散布は3回以内)
ピーマン	アブラムシ類 アザミウマ類 コナジラミ類						
なす	アブラムシ類 アザミウマ類 コナジラミ類 ハモグリバエ類 ネキリムシ類	400株当り 25mℓ	400株当り10~20ℓ (1株当り25~50mℓ)	育苗期後半 ~定植当日	1回	灌注	1回
メロン、すいか	アブラムシ類 アザミウマ類 コナジラミ類						
ししとう	アブラムシ類 アザミウマ類 コナジラミ類	400株当り 10ℓ (1株当り25mℓ)	400株当り10ℓ (1株当り25mℓ)	育苗期後半 ~定植当日	1回	灌注	4回以内 (灌注は1回以内、散布は3回以内)

作物名	適用害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	シアントラニプロールを含む農薬の総使用回数
キャベツ	コナガ、アオムシ ヨトウムシ ハスモンヨトウ ハイマダラノメイガ アブラムシ類 アザミウマ類 ネキリムシ類 ウババエ類	400倍	セル成型育苗トレイ1箱 またはペーパーポット1冊 (約30×60cm、 使用土壌約1.5~4ℓ) 当り0.5ℓ	育苗期後半 ~定植当日	1回	灌注	4回以内 (定植時までの処理は1回以内、 定植後の散布は3回以内)
はくさい	コナガ、アオムシ ハスモンヨトウ ハイマダラノメイガ カブラバチ アブラムシ類						
ブロッコリー	コナガ、アオムシ ハスモンヨトウ ハイマダラノメイガ アブラムシ類 アザミウマ類	2000倍	0.5ℓ/m ²	収穫7日前 まで	1回	株元灌注	4回以内 (定植時までの処理は1回以内、 定植後の処理は3回以内 (但し、株元灌注は1回以内))
レタス 非結球レタス	オオタバコガ ハスモンヨトウ ヒメフタテンヨコバイ ハモグリバエ類 アブラムシ類 ウババエ類						
カリフラワー	コナガ、アオムシ ハスモンヨトウ	4000倍	0.2ℓ/m ²	育苗期後半 ~定植当日	1回	灌注	4回以内 (定植時までの処理は1回以内、 定植後の散布は3回以内)
ねぎ	タマネギバエ タネバエ ネキリムシ類						
ほうれんそう	シロイチモジヨトウ アザミウマ類 ハモグリバエ類	1000倍	50mℓ/株	育苗期後半 ~定植当日	1回	灌注	4回以内 (灌注は1回以内、散布は3回以内)
非結球あぶらな科葉菜類 (こまつなを除く)	アオムシ、コナガ アブラムシ類						
いちご	ハスモンヨトウ アブラムシ類 アザミウマ類 コナジラミ類	1000倍	50mℓ/株	育苗期後半 ~定植当日	1回	灌注	4回以内 (灌注は1回以内、散布は3回以内)

効果・薬害等の注意

- 使用前によく振ってから使用してください。
- 使用量に合わせ薬液を調製し、使いきってください。
- 薬液調製後はできるだけ速やかに使用してください。
- アルカリ性の農薬や肥料との混用はさけてください。
- 過度の連用をさけ、可能な限り作用性の異なる薬剤やその他の防除手段を組み合わせ使用してください。
- 空容器は圃場などに放置せず、3回以上水洗し、環境に影響のないよう適切に処理してください。洗浄水はタンクに入れてください。
- 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬害の有無を十分確認してから使用してください。なお、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましいです。
- 本剤の使用に当たっては、使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、とくに初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましいです。

安全使用上の注意

- 誤飲などのないように注意してください。
- 使用の際は手袋、長ズボン・長袖の作業衣などを着用して薬剤が皮膚に付着しないよう注意してください。
- 水産動植物(甲殻類)に影響を及ぼすおそれがあるので、河川、養殖池等に飛散、流入しないよう注意して使用してください。
- 使用残りの薬液が生じないように調製を行い、使いきってください。処理器具及び容器の洗浄水は、河川等に流さないでください。また、空容器等は水産動植物に影響を与えないよう適切に処理してください。
- 密栓し、直射日光をさけ、食品と区別して、冷涼な所に保管してください。

灌注処理での混用事例

農薬名	はくさい	ブロッコリー	ねぎ	いちご
オラクル顆粒水和剤	●	●		●
ダイアジノンSLゾル				●
トップジンM水和剤			●	
フロンサイドSC				●
ベンレート水和剤			●	●
モメントフロアブル				●
ランマンフロアブル				●
リドミルゴールドMZ				●

●:混用して問題なかった

本頁の混用事例および近接処理事例は、実施した試験をもとに作成しておりますが、品質、栽培条件、使用濃度、使用時期などにより、結果が異なる場合があります。したがって、「薬害がない」ということを保証するものではありません。あくまでも混用知見の一例として考えていただきますようお願いいたします。

近接処理事例

※近接処理の場合、ベリマーク[®]SCは定植7日前~前日に灌注処理。対照剤は定植当日処理。

農薬名	キャベツ	はくさい	ブロッコリー	レタス	トマト	きゅうり	なす
オラクル粉剤	●	●	●				
オリゼメート粒剤	●	●	●	●		●	
ダコニール1000			●	●			
ネビジン粉剤		●	●				
ネマキック粒剤					●	●	●
ネマトリンエース粒剤					●	●	●
フォース粒剤	●	●	●	●			
ランマンフロアブル		●	●				

●:近接処理で問題なかった

成分・性状

委託試験番号 : XI-0701SC

有効成分 : シアントラニプロール 18.7%

化合物の系統 : アントラニリックジアミド系

物理化学的性状 : 類白色水和性粘稠懸濁液体

有効成分の通称 : サイアジビル[®](Cyazypyr[®])

本剤は単剤のみならず様々な混合剤も開発しますので、商品名や一般名とは別に、どの剤型や混合剤に含まれていても確認しやすいように、上記通称を名付けました。

IRACグループ

殺虫剤分類 28

安全性

哺乳類、鳥類、魚類への影響(原体)

哺乳類、鳥類、魚類に対して高い安全性を示します。(普通物*相当)

ラット経口 > 5000mg/kg (LD50)

ラット経皮 > 5000mg/kg (LD50)

ウズラ > 5000mg/kg (LD50)

コイ > 16mg/ℓ (LC50)

*普通物とは、毒劇物に該当しないものを指している通称

適用作物に対する安全性(薬害)

上市以来、薬害事例はありません。